

バラエティー番組で木材乾燥を語る…

岐阜県立森林文化アカデミー 教授 ● 吉野 安里

TV番組の取材陣が森林文化アカデミーにやってきた。芸人さんがユニークな学校を紹介するというバラエティー系番組である。首都圏限定、毎月末の日曜深夜。にもかかわらず、見る人は結構いるという。番組ディレクターが下見に来た。

D (ディレクター氏) 「木材を乾かすって、どういうことですか」

Y (吉野) 「樹木として生えていたのでも水を含んでいます。ナマキですね。スギだと重さの半分は水ですね。生のままだと、いろいろと不都合があるので、乾かして使います…」

(何を挙げようか。一般的には割れる狂うの説明だが、ことの重大性から言えば、たわみだらうか)

Y 「…生木のまま力を受けると、乾いていくときに曲がりやすくなるという性質があります。建物の梁に生木を使うとどうなるか。生木が乾くにつれて屋根など建物自身の重さで梁が曲がっ

てしまいます。戸が開まらず開かない、床が傾く。それに、割れたり、狂ったりしてきますね」

D 「外に置いても乾きますね」

Y 「天然乾燥は、木材を屋外で乾かす方法です。1年以上かかります。色がよい、木の香りが保てる、と根強い人気がありますね」

D 「どこまで乾きますか」

Y 「木材の水分は、木材に対する水の重さの比率で表します。もともと木材1に対して水分1くらいの比率であったのが0・15くらいに、すなわち含水率15%くらいです、日本では」

D 「もっと早く乾かすには、暖かく、乾いた環境に置けばよい」

Y 「そう。人工的に作った環境が人工乾燥装置」

D 「高温乾燥ってあるそうですが」

Y 「加温に蒸気を使う方法が一般的ですね。水の沸点以上を高温と言って、湿った空気は排出して、除々に湿度を下げ

ます。柱材なら天然乾燥で1年以上かかるものが1週間くらいで済む」

D 「最近の技術ですか」

Y 「30年くらい前、そもそも木材乾燥は中温までで、高温はタブー視されていました。木材が割れたり落ち込みがあるのではないかと。まあ、乾燥庫も高温用ではないですね。ところが、ある日、私の先輩がやっていた実験が「高温乾燥」になってしまった。芯持ち材なのに、材面割れが圧倒的に少なかった。これは当時の常識を覆す結果で、にわかには信じてもらえませんでした…」

(面白くなってきたけど、下見には勿体ない話だなあ。やがて、まとめに)

Y 「乾燥初期に、高温低湿条件にする、と、芯持ち材であっても、材面割れが少ない。今では当たり前の技術ですね。高温セット法と呼んでいます」

D 「国産材と外国産材とは性質に違いはありますか」

(おお、なんてことだ。今ここで答えなきゃいけないの?)

Y 「たいへんよい質問です。物的な性質には違いはないが、社会的な性質にはとても大きな違いがありますよ。月とスポンほどに」

Y 「物的な性質とは、乾燥すれば縮むとか、力の方向によって強度が異なるとかの現象です。割箸ならば、折り曲げるよりも、引き裂く方が楽にできるでしょ。産地には関係がない」

Y 「社会的な性質ですが、外国産の木材を買うと、流通マージンを引いて、お金は外国へ出て行く。国産の木材ならば、最終的には、国内生産者へお金が流れるでしょ。植える、育てる、切るまでだと、山元の収入はゼロ。木材を売ったお金が山元に還流されて、はじめて林業となるわけです。ゆえに、外国産ではなく、国産の木材を使うことは、山村振興にとって極めて重要な意味を持ちます」

D 「この学校の、そもそもの存立意義、日本林業の根幹にかかわる大問題をたったひとつの質問で。なんてすばらしい。ぜひ本番でも…」

下見なのに、本番モードで話をしてしまった。やがて、分厚い台本が届いた。まあ、なんとかなるだろう。

芸人さんもスタッフの方々もプロである。当日の取材もうまくリードし、番組も手際よくまとめた。高「高温乾燥誕生の話」や「木材の社会的性質」は番組には登場しなかったが。